

白氏文集 十一 新豊折臂翁 (一一)

加藤淳平

新豊折臂翁 (後半)

新豊の臂を折りし翁

骨碎筋傷非不苦

骨碎け 筋傷るるは 苦しからざるに非ざれど

且圖揀退歸郷土

且つ圖る 退くを揀びて 郷土に歸るを

臂折來來六十年

臂を折りて來來六十年

一肢雖廢一身全

一肢廢すと雖も 一身全し

至今風雨陰寒夜

今に至るも 風雨陰寒の夜

直到天明痛不眠

直ちに天明に到るまで 痛みて眠らず

痛不眠 終不悔

痛みて眠らざるも 終に悔いず

且喜老身今獨在

且つ喜ぶ 老身 今獨り在るを

.....

老人言 君聽取

老人の言 君聽取せよ

君不聞開元宰相宋開府

君聞かずや 開元の宰相 宋開府

不賞邊功防黷武

邊功を賞せず 武を黷すを防ぐを

又不聞天寶宰相楊國忠

又聞かずや 天寶の宰相 楊國忠

欲求恩幸立邊功

恩幸を求めんと欲して 邊功を立つを

邊功未立生人怨

邊功未だ立たずして 人の怨み生ず

請問新豊折臂翁

請ふ問へ 新豊の臂を折りし翁に

(大意) 骨が碎けて筋が傷つくのが、苦しくないわけではない。しかし自分でそれを選んで故郷に残らうと思ったのである。臂を折って以來六十年経った。腕が一本だめになったと云つても、全身はそろつて居る。今になつても風が吹き雨が降り暗くて寒い夜など、夜が明けるまでずっと傷痕が痛んで眠れないことがある。痛くて眠れない。それでも一度として後悔したことはない。自分一人は今の老人になるまで、生きながらへたことを喜んでゐる。この老人の言を、君よ、よく聽取してほしい。あの開元時代の宰相の宋璟(そうえい)が、邊境の地の戦功を賞めないで武の道を汚さないやうにしたことを、君は聞いてゐないか。又天寶の宰相の楊國忠が、天子の恩寵を求めて、邊地の戦功を立てようとしたが、戦功が未だ立たないのに人の怨みが生じたことを。だから新豊の臂を折った翁に聞いて見ることがよい。

新豊の折臂翁は、白樂天の新樂府の中でも、最もよく知られた詩篇の一つです。白樂天が生まれたのは、杜甫の死の翌々年ですから、杜甫や李白の生きた玄宗の盛唐時代は、白樂天にとっては、すぐ前の、華やかなあこがれの時代でした。その玄宗の時代は、はっきりと前後に分かれます。前半は「開元の治」と呼ばれ、姚崇とか、この詩に出てくる宋エイとかの名宰相が輩出し、善い政治が行はれて國力が充實し、文華が盛んな盛世でした。それに對して後半は、玄宗が楊貴妃に迷つて政務を放擲したために、政治が亂れ、楊貴妃の一族の楊國忠が宰相になつて、今の雲南省にあつた強國、南詔との戦ひに大

敗し、安祿山の亂を誘發します。この折臂翁は、さうした戦亂の世に翻弄された一人の庶民の一生を詠ひ、皇帝の歡心を買ふために、邊境の地の戦功を求めて、兵を徴し、民衆を苦しめる政治家の愚かさを戒めた詩篇です。